



TITLE:

日本語否定疑問文の下位類型

AUTHOR(S):

田野村, 忠温

CITATION:

田野村, 忠温. 日本語否定疑問文の下位類型. 言語学研究 1987, 6: 113-113

ISSUE DATE:

1987-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/87928>

RIGHT:

日本語否定疑問文の下位類型

田野村 忠温

1. 現代日本語のいわゆる否定疑問文の機能の多様性は広く知られている。しかし、否定疑問文として一括されるものの中には、文字表記上は同一でも、相互に独立した別個の形式として区別すべきものがある。また、別個の形式とまで見る必要はないにせよ、一つの形式の中に下位区分を認めることが望まれる場合もある。否定疑問文の機能を考える上で、こうした事情の正しい認識を欠かすことはできない。
2. 結論としては、構文・音調・意味に関する諸事実から、否定疑問文は二種三類に分かたれる。「ではないか」で終わる否定疑問文に話を限定すれば、次のようになる。

		接続対象	用法	例
甲種		体言、用言	発見事態の表出、認識要請	やあ、田村じゃないか
乙種	1類	体言のみ	推定を非断定的に表現	どうもあの男犯人じゃないか?
	2類	体言のみ	〈分析的な表現〉	そうか、1は素数じゃないか

甲種と乙種とは、上に示した如く、接続対象の可能性を異にする。例えば、乙種の場合、「×こちらの方がいいじゃないか?」「×雨でも降るじゃないか?」に見る如く、用言には接続し得ない。結局、甲種と乙種の「ではないか」は別個の形式と見るべきであろうと思われる。因みに、方言には、機能上専ら一方に対応する表現が見出される。(例えば、近畿方言の「やんか」「(や)がな」は機能上甲種に、「と違うか」は乙種に相当する。)

また、乙種二類は、/ソ「ス」ウジャ「ナ」イカ/の如く、「ない」の第一拍の所で音調が上昇する。これは、通常の否定文の場合に共通することである。この上昇は、甲種および乙種一類では起きず、/タ「ムラジャナ」イカ/、/ハ「ンニンジャナ」イカ/となる。これは、乙種二類の否定疑問文の分析的性格を物語っている。

二種三類の別は、構文・音調・意味の各面において更に種々の相違として実現することを指摘することができる。

3. 更に、動詞や形容詞を述語とする否定疑問文も、乙種の内部において二類に分かたれることを示すことが可能である。

〔附記〕 詳細は近く論文の形で発表する予定である。

(たのむらただはる、研修員)